楡木小学校　学校通信
No.４６
なりたい自分になる！
PLUS ULTLA
令和７年３月２１日
文責　余宮

卒業生最終号です。欲を言えば、卒業生と保護者の方とご一緒に読んでいただければ幸いです。

群れるのではなく協働的に生きる―卒業生に知っておいてほしい人の生き方

本日のお子様の小学校のご卒業、本当におめでとうございます。6 年間の楡木における学びに、私たち職員一同、心よりの祝福を送りたいと思います。

思い起こせば、6 年生、もとい卒業生の子どもたちの活躍には、毎日心が躍りました。様々に印象に残っている姿があります。運動会では応援団長を中心に学校全員の力を結集させる姿。学習発表会の音を重ねて合奏に高めた演奏を誇らしげに表現する姿。花いっぱいの公園を目指して幼稚園生や中学生と一緒に独創的な花壇を創り上げる姿・・・。もちろん、入学したての 1 年生を優しくサポートする姿や、委員会で 5 年生も巻き込んで楽しい企画や定例活動に勤しむ姿なども、とても素敵でした。そして、授業中の学ぶ姿も。

ありとあらゆる場面で、「協働」的な活動で高め合う姿が非常に印象的な 6 年生でした。

とはいえ、協働的な活動で成果を上げるのは、簡単なことではありません。

人は、人の足を引っ張る、というよくない癖をもっているからです。

もともと、個としての人は、そんなに強くない。それはそうです。像に比べれば非力だし、虎に比べれば鋭い牙や爪もない。蟻ほど多くはないし、クジラほど大きくない。

だから、人が生き残るためには、「群れる」ことが不可欠だった。

そして、道具（火も含む）を使いこなす必要があった。この道具は、群れの中で効率的で創造（想像）的な使い方が開発・継承されていったといわれています。協力しながら、社会を築いていったのです。しかし、集団になるがゆえに起こるいさかい。自分の地位を守らんとする他者への妬みや嫉み、やっかみ。にとどまらず、ここでも悪友を募り、群れて誰かの足を引っ張ってしまう。こうなると、集団としてのモチベーションは劇的に下がり、発展は望みようがない。挙句の果てが、上下関係でつながるだけの、息苦しさを伴う集団に。

協力する（cooperate）だけでは、本当の意味での共同体にはなれない。

もちろん、協力を否定するものではありません。協力を超え、協働的に活動する高みを目指してほしいのです。

他者の強みを知りながら、謙虚に力を借りる。自分を生かせる役割を見つけ、勇気をもって成し遂げる。時には、意見の相違もあるはず。場合によっては、喧嘩してしまうことも。でも、仲間に対するリスペクトがあれば、必ず乗り越えられる。たし算ではなく、常にかけ算で成長できるはずです。なりたい自分たちに、みんなでなれるはず。

それが協働（collaborate）だと、私は思います。

何らかの目標に至るために、仲間と手を取り合う協働は、弱さをカバーするにとどまる協力のみに陥る脆弱さをも克服するはずです。そして協働には、もっとできる、まだやれる、と自身のゴールを安易に決めつけず、さらなる成長を目指す切磋琢磨が似合っています。

そう、それを楡木小では「探究人（たんきゅうびと）」と名付けたのです。

君たちは、それぞれが個としての強さと仲間とともにあらゆる課題に粘り強く挑戦するしなやかさを兼ね備えた「探究人」です。

楡木小にかかわる全員で、君たち「探究人」の旅立ちに、心からのエールを送ります。